

ブラジル、大統領選は「極右」と「左派」の一騎打ちに

～極右政党大躍進の一方、既存政党の退潮は鮮明。ブラジル政治は変化出来るか否かの岐路に～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
 主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522)

(要旨)

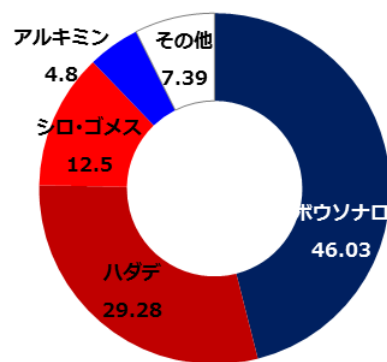
- 7日のブラジル大統領選(1回目投票)では、単独で過半数の票を得る候補は出ず、極右のボウソナロ氏と左派のハダジ氏による決選投票に持ち込まれる。ただし、ボウソナロ氏の得票率は世論調査から10pt程度上積みしており、左派に対する反発票をボウソナロ氏が奪取したとみられる。他方、両候補とも不支持率が4割超の「嫌われ者」どうしであり、決選投票に向けては中道派の掘り起しなど戦略の練り直しが必至の情勢だ。
- 同日行われた総選挙において、ボウソナロ氏率いるPSLは大躍進を遂げた模様である。その一方、テメル現政権を支えるPMDBなど既存政党の退潮は鮮明になった。ただし、多数の政党が乱立する異常な状況は選挙後も変わらず、連立政権の枠組が政策遂行の実現性を左右する事態は変わらない。生産年齢人口の減少など構造問題を抱えるなか、ブラジル政治が変わることが出来るか大きな岐路に立つ状況は変わらない。

7日に行われたブラジル大統領選挙の1回目投票では13人もの候補者が乱立したが、事前の世論調査などで示されたように単独で半数の得票率を上回る候補は現われず、今月28日に行われる決選投票に持ち越されることとなった。ただし、事前の世論調査での結果と同様に、1位には極右政党PSL(社会自由党)から出馬したボウソナロ(Bolsonaro)

候補が、2位には左派政党PT(労働者党)から急遽ルラ元大統領の『代打候補』として出馬したハダジ(Haddad)候補が着き、決選投票は『極右』と『左派』との両極の戦いとなった(詳細は5日付レポート「[ブラジル大統領選は「極右」と「左派」の対極的な試合に](#)」をご参照下さい)。なお、直近の世論調査などではボウソナロ氏の支持率は30%台前半で推移していたものの、最終得票率は46.03%と事前の世論調査を10pt程度上回る一方、ハダジ氏の

得票率は29.28%と世論調査からの上積みはわずかに留まった。こうした背景には、選挙戦終盤においてハダジ氏がボウソナロ氏を猛追する動きが伝えられたため、当初は他の中道候補を応援してきた中道及び右派支持層を中心にボウソナロ氏に投票する動きが広がった可能性がある。事実、3位に着けた中道左派政党のPDT(民主労働党)から出馬したシロ・ゴメス(Ciro Gomes)候補の得票率は12.5%と、事前の世論調査における支持率とほぼ変わらないことを勘案すれば、予想外の形でボウソナロ氏がその他の候補の票を『喰った』と捉えられる。ルラ及びルセフの2代に亘るPT政権の下では、貧困層を対象とする生活保護制度(『ボルサ・ファミリア』)をはじめとする貧困問題が注力されてきたため、低所

図 大統領選(1回目投票)の各候補の得票率



(出所)各種報道などより第一生命経済研究所作成、敬称略

得層などを中心にP Tに対する支持は厚い一方、両氏がともに汚職問題で中心的な役割を果たしてきたことに対して右派を中心にP Tに対する反発は根強い。他方、ボウソナロ氏自身は過激な言動などで物議を醸す状況が続いてきたものの、元軍人という出自に加えて治安強化を訴えたことで若年層を中心に支持を集めたほか、経済政策についても右派的な色合いが強かったことに加え、既成政党と距離を置く政治姿勢は有権者にとって『現状打破』への期待に繋がった可能性がある。1回目投票ではルラ元大統領との『一体化』をスローガンに選挙戦を戦ったハダジ氏だが、予想外に得票率の差が広がったことを勘案すれば、決選投票に向けては選挙戦の練り直しは必至である。他方、ボウソナロ氏も選挙戦を通じて反民主主義的な意見を表明したほか、女性や性的少数者への差別的な言動を繰り返しており、高齢者や女性などからの批判は根強い。事前の世論調査などでは、ボウソナロ氏及びハダジ氏ともに『不支持率』が4割を上回るなど『嫌われ者』どうしであることから、決選投票で過半数の票を得るには固定票を維持しつつ、中道派などの掘り起こしによる上積みを図ることは避けられないであろう。

なお、同日に行われた議会選挙においては、選挙前においては少数政党に過ぎなかったボウソナロ氏を擁するP S Lが大幅に議席数を増やす可能性が高まっており、仮にボウソナロ氏が決選投票を経て大統領選に勝利した場合においても議会運営面での懸念は事前に予想されていた状況に比べて大きく改善すると期待される。議会下院の議席数は513であるが、同国では政党の設立や資金集めが容易なために多数の政党が乱立しており、今回の総選挙を経ても30近い政党が1議席以上を有する極めて異常な政治状況が続く見通しである。こうしたなか、現地報道などによると第1党はP Tとなる見通しだが、議席数は56~57と総議席数の1割強に留まり、仮に決選投票においてハダジ氏が勝利を取めることが出来た場合でも連立パートナー探しに苦勞する可能性は高い。他方、第2党には議席数を大幅に増やしたP S Lが着くとみられ、議席数は51~52と選挙前にはわずか8議席に留まった『弱小政党』の地位を返上する見通しである。その一方、現大統領のテメル氏が属する中道右派P M D B（民主運動党）は数十年に亘って政界で勢力を維持してきたものの、今回の総選挙では議席数を大幅に減らしており、議席数は33~34と第4党にまで転落するとみられる。さらに、P M D Bとともに長年に亘って政界で勢力を維持してきた中道右派P S D B（社会民主党）も、一連の汚職事件に関わる政治家が多数居たことが影響して議席数を大きく減らす見通しであり、既存政党の退潮が鮮明になったと捉えられる。ただし、いずれの政党も絶対的な議席数を有する状況は見込めないなか、次期政権が如何なる枠組によって連立政権を樹立することが出来るか否かにより政策遂行の実現性が左右される状況は変わらない。1回目投票でのボウソナロ氏の得票率の高さに加え、P S Lが大躍進を遂げたことにより財政改革への期待は高まる一方、今後はP Tをはじめとする左派による抵抗が激しくなることは避けられず事態は予断を許さない。生産年齢人口の減少など人口動態の転換に伴う潜在成長率の低下が目前に迫るなか、ブラジル政治が変わることが出来るか否か、大きな岐路に立っていることには変わりがない。

以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

